

べし。櫻の會の歴史は別に會其のものに於いて記録あるべければ、余はここに贅言せず。ただ思ふ、この會はこれわが櫻の爲の中樞的の會合として櫻の爲に繼續せらるべきなり。而して將來の櫻の歴史はこの櫻の會の記録を以てすべきものなりと思ふ。ここに余はこの會の成立を語るを以てわが筆を擱かむと思ふ。

### 擱筆の辭

顧みれば、余が櫻の會の雑誌「櫻」の爲に櫻の歴史を草しはじめしは大正八年にして、十有三年の昔にあり。而して號を重ねること十一回にしてここにはじめて終る。その間多くは多忙の間に筆を起したるが爲に、遺漏せるもの多く、前後せる點少からず、加ふるに才識足らず、見聞廣からず、文章また拙劣にして、櫻の美をけがせること多大なり。罪謝するに辭なし。しかも、余が才の識の乏少にして、かく終りをつぐるまでに到りしものは、一は「櫻」誌の賜にして、一は櫻の

會の幹部諸君の賜なり。「櫻」誌なくば、余が見聞の狭き、いかで、この稿を續け得べからむ。櫻の會幹部諸君の督勵無くば、余が懶惰なるいかで、かく長年月の間稿を續け得べけむや。ここに深き感謝を捧ぐるものなり。

更に終に臨みて一言す。本稿中載すべくして脱せる點少からず、詳にすべくして略せるもの少からず。それらは他日、時を得ば更に補ふべきなり。ここに最後に讀者諸君のこの稿を寛恕して閱せられしことを謝す。

(昭和六年四月二日夜草、昭和十五年三月補)

附録



この巻の終りは、明治の文壇の歴史に於いて記述されるべき重要な出来事として、その意義を論じている。その中で、文壇の発展とその背景を詳しく説明している。

### 文壇の発展

（昭和六年四月二日東京、昭和十年三月三日）

明治の文壇は、明治の文壇の歴史に於いて記述されるべき重要な出来事として、その意義を論じている。その中で、文壇の発展とその背景を詳しく説明している。

### 文壇の発展

明治の文壇は、明治の文壇の歴史に於いて記述されるべき重要な出来事として、その意義を論じている。その中で、文壇の発展とその背景を詳しく説明している。

## 附録

明治の文壇は、明治の文壇の歴史に於いて記述されるべき重要な出来事として、その意義を論じている。その中で、文壇の発展とその背景を詳しく説明している。



櫻

はな

これはとりとめの無い漫談である。中央公論社の畑中氏が見えた時に何心なく漫談をしたのをそれを書いてよこせといふことになつた。その漫談を書いたのだからまづ漫筆といふわけである。話はどうしたはづみか櫻にうつつた。どうしてさうなつたか覚えても居ないが、東京の櫻の事を聞きてゐるうちにつひ／＼話がこんなになつたものか。それは櫻がわが國の花として珍重せられてゐるが、どういふ理由だらうかといふことに關してのことである。

花見といへば、櫻を賞美することであるやうに、古代から花といふと櫻をさしたことは著しい。それは櫻が日本の國の花として代表的のものであり、又櫻が日本人の性格の象徴としても見られるところから來るのであらうと思ふ。しかしながら、一體如何なる點が、日本人の性格の象徴として見られるのかといふ



と一寸答へ難いことのやうに思ふ。私はもとより完全にそれに答へうるものとも思はないが、少しく考へてゐる點が無いでも無い。「花は櫻木人は武士」といふ諺がある。これは假名手本忠臣藏などで人口に膾炙するやうになつたものだと思ふが、そのはじめは知らぬ。さうしてこれは花は櫻を第一とするといふことと武士は四民の第一だといふことをたとへたまでのもので、櫻が武士と同じだといふことでは無いと思ふし、昔からもさう考へて來たと思ふ。然るに、近頃になつてはこの諺の本の意味をすなほに解釋しないで、或る特別の意味をもつてゐるものとして説く人が往々見えるやうだ。或る人の書に「此の山櫻の咲いたかと思ふと未練もなく散つて行く。古歌に『うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見しまにかつ散りにけり』とは名譽と氣節とを尊ぶ我が武士道の其精神と通ひ『花は櫻木人は武士』と謳はるゝやうになつた」と云つてゐる。かやうな説は相當に廣まつてゐるやうに思はれる。近頃或る事で歐人の文の譯だといふ次の文を見た。それは

櫻の花こそ日本人を觀察すべき時である。これその牧歌的哀歌的なる天

性の最も明かに現れる季節だからである。日本の國民的の花は堅い硬ばつた魂なき凋むを知らざる菊では無い。絹の如く、柔かなる華奢なる芳香馥郁たる、短命なる櫻こそ實に象徴である。日本人はこの美しき花の、東の間にしほみ、さうして散りゆく、その中にわが生の無常迅速の譬喩と我が美と青春とのはかなさを見るのである。櫻の花を眺めてゐる時、春の唯中に秋の氣分が彼の胸に忍び入るのである。

といふ文であるが、日本人が櫻を愛することは果してかやうな精神によるのであらうか。

櫻に關する歌は古來甚だ多い。又櫻に關しては古來多くの人々がさまざまの感想を寫してゐる。それ故に、この某氏の言に似たこと、又この外人の言に似たやうな言を吐いた人は全く無いのではない。上にあげてある歌は古今集にあるのであるが、その集はその外に

残なくちるぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ

いざ櫻我もちりなむひと盛りありなば人にうきめ見えなむ



と云つたのがある。これらは元來、落花を惜む情を根柢にしての歌であるが、上にあげた人々の考へに似たやうな點も無い譯では無い。又近世の歌に

君がためちれとをしへておのれまづ嵐にむかふ櫻井の里

とあるのは君が爲に潔く散れといふ思想を主として詠じたものであるから、上のやうな思想のあらはれであるといひ得ないとはいはない。しかしながら、ここに考へてみなければならぬのは多少の例外は無いとはいはれまいが、先づ散るといふことはいづれの花にもある現象であつて櫻の特色であるとはいはれまい。それならば櫻の特色はその散り方の潔いのをさすのであらうか。しかし、散りかたの最も潔いのは

ほた／＼と椿の落る朧月

稻妻のつまに落たる椿かな

散迄もちらぬけしきを椿かな

といふやうに、椿の花を第一とする。けれども昔からこの散りぎはの潔い椿を

武士に比したことをきかない。しかしながら椿は散るといふよりは落ちるといふ語の方が適してゐるやうであつて、昔から御幣をかつぐ者共は忌み嫌つたことさへある。(その花瓣が普通椿の花のやうにばら／＼になつて散る性質の椿には特に散り椿といふ名がある位であるから普通の椿の花は散るといはないで落ちるといふのである。)椿とはちがつた散り方をし、しかも最も鮮かな散り方をするのは罌粟の花である。罌粟の花は見た目も美しいものであつて、その罌粟畑の満開の美しさは目もさめるほどである。さうしてその花は開くとすぐに花瓣が散つてしまふことは

けしちるや外の花には恥多し

似合しき芥子の一重や須磨の里

見ればはや葉にこぼれけりけしの花

などの句にもある通りであつて、誠に槿花一朝の榮よりもはかないものであるが、潔く散ることの標本としてこれに過ぎた花は無いかとも思ふ。罌粟の花は近世になつてもはやされるやうになつたから、古歌の例は稀であらうが、假名



手本忠臣藏の時代には盛んに俳諧などによまれたことは疑も無いのに、この散り際の鮮かな、しかも美しい花をば一向そんな例にもしないのはどうした事であらうか。

櫻の花盛りになると近世の日本人は花見といふことを催す。この花見には上にあげた人々のいふやうな點が少しも無いのはどうしたものであるか。しかもこれは近世だけでは無い。室町時代の謡曲にあらはれた花にしても又その前から連歌を花の下に催したことにしても、更に溯つて鎌倉時代から平安朝時代にかけても同様である。遠く花を尋ねては櫻狩を催し、近く庭の花を愛しては花宴を催した。源氏物語には卷の名にさへ花宴といふのがある。これらは決して花の散るについて心を傷ましめての催しでは無かつた。花の散るを惜むのは人世をはかなんでの事では無かつた。大江佐國が花を愛した執心のあまり蝶に化したといふ傳説にもさやうな傷心な態度が見られない。又平安朝時代から諸社諸大寺に櫻會さくらあひまといふ催があつた。これも、朝廷の花宴後世の花見と精神の通ふものであつたと思ふ。

私はかつて、櫻の會の機關である「櫻」といふ雑誌に櫻史といふものを數年にわたつて書いたが、つもり／＼して、百頁足らずになつたが、それにも書いておいた通り、上にいふやうな花を感傷的にみるといふ方面の事は日本人としては例外とせねばならぬ状態にある。吉野山に於いては「歌書」よりも軍書に悲し「吉野山」と云つた通り、感傷的の詩歌が少くないのみならず、それらは大にわれわれに哀れを催さしめる。しかしその感傷は花そのものの本質に導かれたものでは無い。吉野朝そのものの悲劇的史實を爛漫たる花に對して考ふる時に一層の悲哀を感ずるからであらう。即ちこれは花そのものに悲哀がやどつてゐるのではあるまい。

櫻はやつぱり賀茂真淵の「うら／＼」とのどけき春の心よりにほひ出でたる「山櫻花」といふのが、日本人の魂にやどる櫻の本體であらう。本居宣長の「敷島の和心を人とは、朝日に匂ふ山櫻花」と云つたのもそれと殆ど同様であるが、日本人の魂そのものを逆に櫻花によつて説かうとしたものであらうが、これにも大した理窟は無い筈である。しかし、かやうな風に櫻を賞美することは、



決して近世にはじまつたものでは無い。萬葉集の  
青丹よし奈良の都はさく花のにほふが如く今盛りなり  
は奈良の都を櫻に準へて讚美したものであるが、その櫻の美しさはまさしく眞  
淵宣長のいふ所のものに同じ美はしさである。

櫻は歸する所、上述のやうなことを以て美とも見られ又日本の花としても  
賞せらるるのであると思ふが、然らば如何なる點が日本人の魂にふれるのであ  
るかと考へてみると、私はここに兼好が山櫻を賞美して八重櫻はことやうのも  
のなりと云つたことを思ひ出す。八重櫻を異様ことやうのものだといふ反面は即ち  
「花はひとへなるよし」といふわけなのであるが、どうして一重の櫻を賞美して  
八重櫻をこと様のものだとするのであらうか。ここに日本人の花に對する觀  
念の根柢がないのでないだらうか。櫻を賞美して花といふ。單に花といへば、  
古來櫻をさした。それはちやうど、太閤といふのは元來前關白をさす稱號であ  
つたが、それが、單に太閤といへば豊臣秀吉をさすものと思はれるやうなもので  
あるが、その花といはれるものは八重櫻で無くて一重の櫻であつたことは著し

いことである。清少納言の枕草子には「櫻は花びらおほきに葉色濃きが枝ほ  
そくて咲きたる」ものをよいとしてゐる。これは花の大きなのを賞美したも  
ののやうにも見えるが、しかし、又同じ人が「繪にかきて劣るもの」として「撫  
子、櫻、山吹云々」と云つてゐることも考へてみねばならぬ點であらう。

櫻を賞美するのに八重櫻は異様のものだと貶して一重の櫻をよいとするの  
はどういふ理由があるのかと考へてみる。一個の花房だけについて見れば、一  
重の山櫻の如きものは瓣は五個にすぎず、色は純白といはれないけれど、先づ白  
いものといはねばならぬ。こんな花を一輪二輪繪にした所で何の美があらは  
れようか。一輪二輪だけ畫にするならば、寧ろ八重櫻の方がすぐれてゐるとい  
はねばならぬ。然るに一重の櫻を賞美するのはどういふ理由かと考ふるに、こ  
れは多くの花が枝もたわゝに咲き満ちるその全景の美にうたれるからである。  
その場合には一個一個の花を一々に吟味するのでは無い。枕草子に「枝ほそ  
くて咲きたる」といふのは、花重げに枝もたわゝな有様をば、賞美の條件に入れ  
てゐるのである。一本の樹に於いてはまさに枕草子のいふが如き花でよいと



思ふが、しかし、枕草子の著者は恐らくは當時の櫻狩をしたことはあるまい。  
櫻狩雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の陰にやどらむ  
といふ感は、平安朝の宮廷婦人には経験せられぬことであつたらう。それ故に、  
清少納言は「花びらおほきに」と云つて山櫻よりも園藝種を賞美した。しか  
し、吉野山の花の美は山櫻の無数の林立して雲か霞かあやめもわかぬところに  
ある。

## 吉野山霞のおくはしらねども見ゆるかざりは櫻なりけり

といふのが、花そのものの極致である。而してこれを賞美するものの心は眞淵  
宣長の歌と同じである。これは決して一個一個の花房を賞美するといふこと  
でなく、又一本二本の花樹の花盛を賞美するといふことでもなく、多数の樹木の  
集團によつての無数の花の集合の上に美がやどつてゐるものである。それ故  
に一つ一つの花を賞美するを要するやうな八重櫻は結局異様のものになるの  
である。單瓣白色の山櫻の花を枝もたわゝにつけたものが無数に群をなして  
一抹の雲の如く霞の如くに見ゆるところにえもいはぬ美はしさがやどると思

ふ。これがうら／＼とのどけき春の心のあらはれであり、それに朝日がいさぎ  
よく照り映えてゐる所に日本魂の美の象徴があるのだと思ふ。散りかたがど  
うのかうと云つてゐるやうな人は勝手にいはしておいて我々はわが日本魂の  
美をこの爛漫たる櫻の上に求むるであらう。さうしてそれは

## 花の雲鐘は上野か淺草か

といふごとく、西洋流の分析的の學問などではとてもわかりうべきものではな  
いと思ふ。この美は一個一個の花を一々描寫してゐては幾十年かかつて吉  
野山の櫻など完成する見込もあるまい。そこにわが倭畫は雲や霞と同じ様な  
手法で全體を描き、さうしてそれによつて櫻花そのものの大觀を與へるといふ  
手法を按出したのである。この手法をとらないときは櫻はいつでも「るにか  
きて劣る」ものである。

櫻の美は實に多くの花の集合した全體の上にあらはるる美である。これは  
一面からいへば、日本人の個人的の主張を十分に有しつつも、全體の爲には没我  
の態度に出づる日本魂の象徴と考へられぬことは無い。日本人だとして菊とか



牡丹とか薔薇とかチューリップとか一個一個としてすぐれた花を賞美することを忘れては居ない。しかし、それらの花はやはり個人的の感想を伴ふことを免れない。國民的感情のあらはれとして、又國民的感情の同感しうるものは花の雲であり、花の霞である。これは没我歸一の姿そのまゝの象徴であるといひ得ないことも無い。さうしてかやうなことはただ櫻に限るわけでは無い。躑躅の如き、山吹の如き、卵花の如き、萩の如き、みな集合的の美そのものである。これらを一個の花房について見るとき何人が日本人のこれらに對する美感と同じものを感じうるか。われわれ日本人はかやうに花に對してだけでは無い。薄や荊萱や、一つ／＼には見る影も無いものでもこの集合的大觀はめざましいものである。かくして紅葉も亦同様の美感のあらはれである。而して、それらは皆大觀的手法を用ゐなければ、繪にかきて劣るものである。これらの花や紅葉の美を認識しうる所に大和魂的のものがあらはれるであらう。(中央公論昭和十三年四月號掲載)

### 日本精神と本居宣長

#### 大和魂の眞諦

しきしまの大和心を人とは

朝日に匂ふ山櫻花

この歌はいふまでもなく、本居宣長の詠じたものである。これは日本精神をば朝日の前に咲きにほふ山櫻により象徴したものであるが、しかもこれは、自身の肖像の上に題したものであるから、宣長自身の心を詠じたものとも觀じなければならぬものであらう。

この歌につれて私がいつも直ちに聯想するのは賀茂真淵の歌

うらく／＼とのどけき春の心より

匂ひ出でたる山櫻花



## と、谷川士清の歌

何ゆゑにくだきし身ぞと人とは

それと答へむ大和たましひ

との二である。甲は櫻の花の麗はしさをたたへたもので、凡そ櫻の麗はしさをたたへた歌としてはこれほどのものは他に得られまいものである。乙はいふまでもなく、大和魂の眞諦を語つたものである。この大和魂の眞諦と櫻の花の麗はしさを兼ね備へたもの、これ即ちこの大和心の歌であつて、これによつて日本精神の麗はしさを體得しうるものと思ふ。

櫻はわが國の國花だといひ、そして日本精神の象徴だともいふ。この考へに對しては、自分も同様であるといひうる。しかしながら、櫻花がいかなる點において日本精神の象徴であるかといふことになる。近頃世に行はるる説には首肯し難いものがある。このことは私が既に論じた事もあるが、その櫻の花が潔く散るとか、或は武士道に一致するとかいふやうな理窟から説くといふことは眞の櫻花を認めたとはいふことが出来ない。

近頃に至つては更にこれを歐米の最もちたき理窟にかぶれて、ある歐人が「日本人はこの美しき花の束の間にしほみ、さうして散りゆくその中にわが生の無常迅速の譬喩とわが美と青春とはかなさを見るのである」と云つたのを賛成して、その意味で櫻が日本人の象徴だと云つてゐるものがある。これらは皆全く日本精神を知らぬものである。

日本精神を櫻に比するのは花の麗しさをもつて比するのである。これを道徳觀から説いたり、哲學から論じたりすることは今の世に歓迎せられるかも知れないが、それは眞の日本精神といふものを考へて來ると賛同し得ないものである。道徳または哲學を櫻に求めむとするときには附會の説以外に何物をも得ることがないであらう。しかるに、かくの如きことを敢へてするものがあるならば、その人は本居宣長の所謂ちたき漢心からんこころといふべきものであるが、今日の人人の弊はその漢心よりも一層ちたき西洋魂といふべきものであらう。本居宣長は漢心がわが國の教へ、また道をいたく害したことを歎いて

ひさかたの天つ月日の影は見じ



戎の意の雲し晴れずば

戎書のさ霧いぶせみ科戸邊の

神のいぶきの風待つ吾は

と歌つたのであるが、今の西洋魂の跋扈を見ては更に一層慷慨せられるであらう。凡そ漢學、西洋學は皇國の道の羽翼臣隸としてこそ用ゐらるべきである。羽翼臣隸を主と仰ぐが如きは禍といふ外に何のいひやうがあらうぞ。この漢心、西洋魂を祓ひ去らずしては日本精神はさとられぬ事であらう。

古事記傳の精讀

そも、櫻と本居宣長とは深き由縁のあることである。宣長の父は吉野の水みくまりの分神に祈りて宣長を授けられたのだといふ。されば宣長は吉野にაცがれ、その山に詣り、且つ平素櫻を愛すること一方ならぬものがあつた。さうして、その歿後門人共は秋津彦美豆櫻根大人あきつひこみづさくらねおとなと稱へその塚の山に櫻を植ゑて師の志を果したのである。

櫻の山に鎮まらず神より授けられた子たる宣長は眞に櫻の化身といふべきである。その歌に文に櫻に及べば一しほ力を込めて歌ひもし、作りもしたのである。それらの歌や文は一々これをあぐるに堪へぬが、それら多くの歌のうちで最も代表的なものは上の大和心の詠である。これは一面櫻の歌としても比類稀なるものであるが、大和心の歌としては最もすぐれたものといふべきであらう。大和心と櫻と宣長の三者一致して始めてこの詠ありといふべきである。

上の宣長の歌は櫻を詠じた歌ともいひうるものであり、しかして大和心を詠じた歌であることはいふまでもないが、それは同時に宣長の精神を詠じたものでもある。かくして、結局は櫻花の眞の美を知れば、大和心も宣長の精神も知らるべき道理である。然らば、この歌はいかに了會せらるべきであるか。宣長の門人にして養子となり、その家學を繼いだ大平が、ある人に遣した書翰に次のやうにいつたことがある。

朝日に匂ふ山櫻花の御歌、人人の問ふ處に御坐候。先師はたゞうるはしき



よしいひ置れたるのみに候。

ただこれだけでこの歌の真意は盡きてゐるのではないか。我々は櫻に對してはただ「うるはしい」といふ一語で感歎するだけで、他の語を發し得ない。この際に、言を弄すれば、その言の多くなればなる程度に應じて感賞の念は薄らぐのである。日本精神、即ち大和心もただ「うるはしいものだ」といふだけでよいのであらう。これをこちたき理窟で説明すれば、その委しさの程度につれて日本精神に遠ざかるものになるのであらう。

凡そ美を享受するのは理解を得ようといふのではなく、直感的に體得するのである。日本精神もまた言詮を絶したもので、直觀的に體得する外にこれを受する方途はないので、これを説く時に、既に第二義に墮してゐるのである。

日本精神と本居宣長といふ題を掲げてみると、この大和心の歌だけで澤山なものだといつてよからう。この歌をよく味讀して得るところあらばそれでよいはずであつて、それより外に言を加へれば、それは蛇足であらう。しかしながら、これだけではものたらぬといふ人のために姑く蛇足を加へて見よう。

本居宣長に見るところの日本精神といふものはこれをいかに説明しうべきであらうか。ある意味からいへば、宣長一生の研究は皆これ日本精神の闡明を目的にしたものだといふべきであらう。また宣長一代の著述は皆これ日本精神の記録だといふべきでもあらう。更にまた宣長の全生涯これ皆日本精神の發露だといふべきでもあらう。しかしながらそれら多くの著述の中にもそれぞれ主とする點の差違によつて一樣には論ぜられぬもので、それら多くの著述多くの研究の一一が、隅から隅まで日本精神ばかりを説いてゐるとはいはれぬ。最もよく宣長の精神を知るのには古事記傳を精讀すべきであらうが、その眼目とするところは直毘靈に述べてある。この書は宣長の信ずるところの皇國の道を説いたもので、そのいふところはわが國體の世界に類無く貴くすぐれたものであることを論じ、かくてこの國體のすぐれてゐるのは、要するにその基たる日本精神のすぐれてゐるのよること説くといふところに重點をおいてゐる。

玉鉾百首は宣長が主張する皇國の道そのものを詠じたものである、以上の書



どもで宣長の思想は大體見ることが出来る。なほいはば「玉くしげ」がある。これは皇國の道を基として政治を行ふ心得を説いたものである。また馭戎慨言がある。これは外國に對して皇國の道の發動した迹を説いたものである。しかし、かやうに段々こまかく説き進めると、全著述をあげなければならなくなるからここで止めておく。

### 道を行ふ心得

國體については直毘靈のはじめに委しく説いてゐる。かくして、この國體のすぐれてゐるのはその基たる道のすぐれて貴き故であることを説いてゐるが、この道はいかにして生じ、いかなるところに行はるべきかといふことについては玉勝間に

道は高御産巢日、神産巢日御祖神の産靈によりて伊邪那岐伊邪那美二柱の神のはじめ給ひ、天照大御神の受ケ行はせ給ふ道なれば必ス萬の國々天地の間にあまねくゆきたらふべき道也。

といつてゐるが、その道がわが國にのみ傳はつてゐる理由については

殊に皇國は萬の國の本、よるづの國の宗むねとある御國なれば萬の國々にわたりに正しきまことの道はたゞ皇國にこそ傳はりたれ。

と説いてゐる。

宣長はかくのごとく道の本來わが國に固有したことを主張した。しかるに、わが古典に道といふことを説いてゐないと論ずるものがあるが故にこれに對しては

是ぞ上もなき優れたる大きき道にして實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど道ありしなり。

と説き、さうして

此道はこれ天下を治め國を治むる先務要道なることをしれる人はわれいまだ夢にも見きかず、いとまかなしき事ならずや。

と慨いてゐる。しからばその道は神皇の道にして臣子たる我々の道ではないのかといふに玉鉾百首には



天の下青人草の朝夕に

御蔭とよそる道は此道

とうたひ玉くしげには

人も人の行ふべきかぎりをば行ふが人の道にして、そのうへに其事の成と成ざるとは人の力に及ばざるところぞといふことを心得て強たる事をば行ふまじきなり。

と説いて道を行ふ心得を教へてゐる。さてその道を行ふわれ／＼の心根はいかにあるべきかといふに直毘靈に

すべて何わざも大らかにして事足りぬることはさてあるこそよけれ。

といひ、さかしらすることを深く戒め、ただ真心のままに行ふべきことを強く主張する。玉銚百首に

真心をつゝみ、隠してかざらひて

偽するは漢の風俗

唐人の所爲ならひてかざらひて

おもふ真心偽るべしや

と詠じたのはこのためである。

宣長のいふところの大和心は要するに、この真心そのものでありさうしてそれは極めて大らかにしてさかしらすることもなく、すなほに神皇の大道に服従ひ奉るものである。さうして、この道は國體にやどり存するものである。ここに國體とこの道と大和心とは三にして一に歸すべきものである。

宣長はその著述の上でも明かなるが如く、元來温厚な人で激しい語を發せぬ人であつたと思ふが、その佛教儒學のわが神皇の道を害したことに關しては痛論して寸毫も假借しない。かくて、その常にいふところは穢き漢意を去れといふことであつた。しかしながら漢意を去るといふことは容易のわざではない。それ故に宣長は

漢心直し賜へと大直毘神の直毘をこひのみ奉れ

と教へてゐる。かくて直毘神の靈妙な發動を請ひ奉つたのである。漢意を嫌ふこともさることであるが、一層強く宣長をして憤慨せしめたものはわが國體



を賊する徒である。玉鉾百首に蘇我馬子及びそれに黨した人、また北條足利を叱責して假借することがない。更にまた承久建武の御世を回顧しては悲憤の涙にくれてゐる。

日本精神を有する本居宣長は熱血男兒である。學者としては冷靜、明鏡の萬象を照すが如く、國士としては嚴肅、銳刃の堅磐を裂くが如きもの、これ日本精神そのもののあらはるべき相であることを私は宣長に見る。

宣長の日本精神は春の日のうららかにして暖かなるさまに比すべき一面を有するが、また一面には秋霜烈日の如く邪惡を寸毫も假借しない潔白さをも有する。このうららかさと潔白さとはまことに朝日に匂ふ山櫻花の具有するところであり、しかしてこれ日本精神の眞諦である。

(昭和十六年一月朝日新聞掲載)

# 櫻 史 索 引



書誌名

あ

- 櫻花五百詠 二九四
- 櫻花三十六品帖 二九三
- 櫻花寫生 一八三
- 櫻花敷 一八二
- 櫻花袖鑑 二六七
- 櫻花圖譜 一八三
- 櫻花帖 一八三・二六七・二六九・六五
- 櫻花譜 二八九
- 櫻畫帖 二七一
- 櫻史新編 三〇一・三三三
- 櫻譜 一八・八九・一九〇・三三
- 櫻賦(平野知秋) 三三・三三三
- 櫻品 三二・三三
- 亞槐集 一九
- 飛鳥山賦 二六
- 東鑑 九五・六六・九七

櫻史索引

近江御息所歌合  
嵐山(謠曲)

い

- 石山縁起繪卷 六・一〇〇・一〇二
- 伊勢參宮名所圖會 一六〇
- 伊勢物語 一七
- 一話一言 一七
- 今鏡 三四
- 印明記 三四

う

- 右近(謠曲) 一五三
- 鶉衣 二六・二六三
- え
- え
- 榮花物語 三三
- 江戸名所圖會 三三

お

- 江戸名所花曆 二四〇・二四五・二四六
- 延慶本平家物語 六九
- 翁草 一八六
- 大原山家記 二八
- 大原野十花千句 一五〇
- 御湯殿上日記 一四五
- 小鹽(謠曲) 一五三

か

- 江北櫻譜 三五六
- 春日驗記 九
- 賀茂祭繪詞 九
- 借物辨 二六三
- 閑吟集 一五四・七四
- 翰林五鳳集 一三・二八・一四〇・一四一・一四七
- 鷺峯文集 三三
- さ
- 朽瓠子格物微 二五七

四〇三



宮中儀式略	三六	活所櫻譜	三三	古今集〔古今和歌集〕	四〇四
季瓊日錄	一一三・一二三	花圖說	二九〇	國史記事本末	七・一八・四〇・四九・五三・五九
北山殿行幸記	一一三	花鳥曆	二九二	古今著聞集	三三三
京鹿子娘道成寺	一一三	花譜	二九〇・二九四	古今要覽稿	五八・六三・六六・六七・七三
京都坊目志	一一三	觀櫻記	二四七	古事談	七四・八三・八六・八九・九一
京羽津根	一一三	觀櫻譜	三〇八	湖亭涉筆	三〇・二九〇
學白集	一七	還魂紙料	三三	後撰集	二七・二九
金葉集異本	一七	京城勝覽	二〇三	後撰集	二〇八
近世喻人傳	二六・二七	慶長見聞集	二四	五代帝王物語	五三・五九
禁秘御抄	二六・二七	堯好法印日記	二四	後奈良院宸記	九二
玉葉	三〇	教言卿記	一四五	後二條師通記	二五・四三
玉葉集	六	月堂見聞集	二四	栽櫻記	三五三
國造本紀	一一	源氏物語	三五・三〇	西行櫻(謠曲)	一五三
鞍馬天狗(謠曲)	一五	源平盛衰記	八二・八三	西宮記	三五
花棠	二五	撰篋小集	三四	催馬樂	六七
廻國雜記	一五	玄與日記	一四	濟北集	一三
懷風藻	二五	小金井の碑記	三九	「さかゆく花」の巻	一三三
花隱櫻譜	一八			作庭記	七
花壇全書	二九				

「櫻」	一八二・三九七・七二・七三	十訓抄	四六・五	助六所縁の江戸櫻	三三〇
櫻川(謠曲)	一五	集外歌仙	一八四・一八五・一八六・一八七	墨染櫻(謠曲)	一五二
櫻會縁起	六	拾遺集	四・五		
櫻川志	三六	社記	二六	せ	
櫻川事蹟考	三六	沙石集	三六・三九	旌櫻寺觀花記	三四
櫻番付	二九	稱名院吉野詣記	一四	勢陽五鈴遺響	一六〇
櫻賦	三八・三四	諸國里人談	一六	勢陽雜記	一六〇
櫻之辯	二二・二二	新葉和歌集	一九	昭代樂事	三五
實泰公記	一〇	新儀式	三五	尺素往來	二七
山家記	一七	新古今集	一九・二〇・元・五三	千載集	七
三花手控	二九	新三十六歌仙	五八・八四・八六	そ	
三十六櫻譜	二五	新拾遺集	一八四	續近世喻人傳	一八五・一八七・二六六・二七二
三十六人撰	一八	新千載集	八四	續後拾遺集	八四
三代實錄	五	新撰東京名所圖會	六五・七五・七六・九三	續後撰集	八四
散木集	六	新編櫻花集	三四五	續史愚抄	一〇三
蹴鞠簡要抄	七	彙譜	三五七	續詞花集	六二
家芳軒雜錄	二七	神功皇后記	一〇	續千載集	八四
志賀(謠曲)	一五	菅笠日記	二七・二七七	續日本後紀	二八
詞花集	三			續門葉集	八九



た

泰山府君(謠曲) 一五三  
體源抄 八九  
醍醐寺雜事記 四六  
太平記 二九  
瀧櫻記 三〇四・三〇六

ち

中古三十六歌仙 一八四  
親長卿記 一〇五・一〇六  
竹林抄 一四二  
長秋記目錄 二九三  
長者ヶ丸櫻譜 一七〇  
長録寛正記 一三三  
塵塚物語 一三四・一三五・一三六

つ

積戀雪の關扉 三三〇  
徒然草 七六・八五・一〇六・一〇七・一三五

て

朝野群載 四四  
天狗雙紙 四六  
天寶遺事 一七三

と

東海瓊華集 一四七  
東國紀行 一五九  
東大寺櫻會緣起 四三  
東野州閑書 八  
徳川實紀 二四二

な

長崎夜話草 二二五  
長興宿禰記 一七〇  
成島道筑撰碑 二四四

に

西洞院時慶の日記 二〇一  
二水記 一四〇・一四三

ね

日工集 一四七  
日本紀略 三四・三六・四四・五二  
日本後記 三三  
日本書紀 一〇  
女房三十六歌仙 一八四

の

年中恆例記 一四六

宣胤卿記 一六

は

梅花無盡藏 五〇・一四七  
佩弦齋雜著 三四  
八笑人 二四五  
花争(狂言) 一五四  
花鑑 二五七  
花圖説 二九〇  
花錦 二五七・二五九  
花之鑑 二八四

花折新發意(狂言) 一五四  
斑鳩嘉元記 二二六

ひ

日記紀事 一九・二〇一・二〇三・二三五  
百鍊抄 五四・七五

ふ

風雅集 六三・八三  
袋草子 元  
富士見道記 一五九  
藤澤道場繪卷 一〇〇  
藤原光經集 六六  
不斷櫻(謠曲) 一六三

へ

平家物語 六八・九  
碧山日録 一六・一四四

ほ

北條家分限帳 三三

寶物集 四九  
北山抄 三三  
法然上人繪傳 一〇一  
發心集 四七  
本草綱目啓蒙 二五七  
本朝續文粹 四七  
本朝無題詩 四九・六一  
本朝文粹 三二・六〇

ま

枕の草子(枕草子) 五九・六〇・二六六  
枕の山 二七・二八〇  
正子内親王繪合 六四  
正廣日記 一五八  
増鏡 八〇・九〇・九一・九二

松の落葉 三九

松の葉 三三

萬葉集 二二・二三・二四・二六・四〇

み

密宗血脈抄 四三  
水帳 三三  
都名所圖會 一〇一・一〇四

む

夢窓の集 二二・二三四  
紫の一本 二八・二九・三〇・三二

め

名花有聲畫 三四  
明月記 六・八・二八・四八  
明治年中行事 三三・三三六

も

藻鹽草 一四四  
文徳實錄 四二

や

洋々社談 三三  
野史纂略 三三  
山城名勝志 九二・一四一



遊庭秘抄

よ

雍州府志

浴恩園櫻譜

吉野紀行

吉野天人(謠曲)

吉野の栞

芳野賦

吉野百首

ら

蘭山十品考

り

凌雲集

る

類聚國史

六

わ

和漢三才圖會

和漢朗詠集

倭花名品

二六

二五

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

ろ

六條道場繪卷

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

人名

あ

櫻顛(久保帶刀)

秋里離島軒

安積覺

朝倉義景

朝吹常吉

淺見綱齋

淺井圖南

足利高氏

足利高經

足利直義

足利義昭

足利義滿

飛鳥井中將

飛鳥井雅章

飛鳥井雅經

飛鳥井雅康

二九・二九

二〇二

二〇八

一四三

三六九

三二・三〇

二五九

二四・二三・二四

二三

一七〇

一四二

一三三・三四・三五・二六

一五〇

八一

八〇

一八六

厚見王

跡見玉枝

穴山義平

栗田在衡

栗田久盛

安倍季春

有栖川宮

在原業平

有馬涼及

荒礪命

青山延子

青山延光

青山延壽

安法法師

い

い

い

池原以文

九・一〇

三三

三三

二六

二八〇

三〇五

三〇一

五七・三九

一九〇・一九

二

三三

三三

三三・三四

三四

三三

二九五

二二六・三九

二五一

一七六

三六四

三四一

三三九

三六

二八

二七

一九

二八九・二九〇・二九一

一八五

二五三・二五四

二五〇

三六五

二二

一一

二六九

三六九・三七

九

一〇



飯島平藏 三六  
飯田巽 三四五  
今尾景年 三六七  
家定〔木下〕 一七六  
色川三中 三七・三八・三九  
允恭天皇 一二・一五・一三  
苗代兼載 一七四  
井上蘭臺 二五四  
井下清 二五・二七  
う  
植木八三郎 二六九  
牛若 一五三  
宇田川總兵衛 三四〇  
宇多天皇 三四・四一・四三  
有智子内親王 三三  
内海内務大臣 三九  
采女朝臣比良夫 二五・二六  
上野岑雄 四九・五〇・一五三  
下部兼好 八五・〇六  
雲虎和尚 三三

え  
えん  
映丘 一〇一  
英帖 一五一  
延壽 三四  
圓融天皇 三五・五〇  
お  
おを  
お秋〔秋色〕 三三・三三三  
奥田竹松 三九・三七  
尾崎斑象 三三・三四  
尾崎行雄 三五  
織田信長 一六・一七・二六  
織田瑟瑟々女 二九・三一  
弟姫 二  
大江佐國 四・四六・四七・六一・六八  
大江朝綱 四七  
大倉喜八郎 三四一  
大竹多氣 三五七・三六・三四  
大田南畝 一九七・一九八・二六三・二六九  
大塚幾藏 三四五

大塚とう子 三四六  
大伴池主 一八・二四  
大友黒主 一五・一三  
大伴旅人 九・一五・一六  
大伴家持 八・九・一〇・一五・一七・一八・二二・二四  
多政方 六  
大橋重省 三七  
大炊御門經久 三四  
大政所〔高臺院〕 一七  
大海原尙義 三四  
大村由己 一七〇  
大目寒玉 二二  
小山の五郎 二二  
恩田技師 三五  
岡澤侍從武官長 三九  
岡中惟中 二二  
小川土佐守 一七  
岡部長職 三四七  
小澤敏行 三〇  
小野老 一〇  
小野蘭山 二五七・二五九

園城寺左馬助

か

孝謙天皇 四三  
康哉 三六  
高臺院〔大政所〕 一一〇  
河野鐵兜 一一〇  
孝明天皇 三〇  
香山益彦 二〇一  
柏木右衛督 二〇  
膳ノ臣余磯〔稚櫻部の臣〕 一〇・一一  
歌仙女 二七  
勝安房 三四  
勝俊〔木下長嘯子〕 一七四・一七五  
加藤清正 一九七  
狩野探幽 三六  
狩野芳崖 一八四  
狩野蓮長 二四六  
川崎平右衛門 三〇六  
川田小一郎 三〇四  
河田迪齋 三〇四

川村曼舟 三六八  
貝原益軒 二〇三  
龜山天皇〔上皇〕 九〇・九一・九三  
加茂季鷹 三四  
賀茂成助 四四  
賀茂眞淵 三五・三五五  
賀茂成經 四五  
菅家〔菅公〕 三四・二六

き

其角〔晉子〕 三三  
菊池寂阿 三〇七  
菊地芳文 三六  
北澤正誠 三四  
北政所 一七・一七三・一七六  
北畠玄慧 八九  
北畠親房 一五  
北村季文 二八・二八五  
木戸玄齋 一八五  
木下長嘯子〔勝俊〕 一六・一七・一七九  
一八五・一八八

紀貫之 五九・六九  
紀友則 四〇  
清浦司法大臣 三九  
玉瀾 二五二  
金太〔増田繁亨〕 二九・二九三

く

草川次榮 三〇五  
屈原 三三・三三三  
久邇宮殿下 三九  
國信 六五  
桑名技師 三五九  
久米女郎 二二  
グラント 三六一  
栗原信秀 三二二  
黒主〔大友〕 三四・二〇三  
光孝天皇 三〇五  
光格天皇 二四  
光嚴院 四三  
光明皇后 三三・二九  
臥雲山人〔瑞溪〕 二二・二八



花山院大納言 二七〇  
 觀世喜之 一六三  
 桓武天皇 二七・五・二〇一  
 け  
 契沖 三六  
 月湖 二六五  
 兼好法師〔下部〕 九五  
 源九郎義經 一五〇・一五  
 玄哉 一七〇  
 玄旨 一五〇  
 玄仍 一三三  
 元政 一三三  
 顯昭 六三  
 こ  
 小出燦 三六六  
 小出侗齋 二六二  
 蒿溪〔伴〕 二六五・二六六・二七三  
 勾當の内侍 一五・一六  
 浩然〔坂本〕 二九一・二九三  
 兒島高德 一二・二三  
 木島櫻谷 三六  
 木花之佐久夜毘賣 七・二〇  
 近衛學習院長 三九  
 小松彰 三四  
 小室翠雲 三八  
 コリンウド・イングラム 三二・三三  
 惟明親王 八四  
 惟喬親王 五・五七  
 惟宗孝言 四七・六  
 近藤芳介 二〇二  
 金王丸 二八  
 後宇多院 九三  
 後京極院 八  
 後京極攝政良經 八  
 後光嚴院 一三  
 後小松天皇 一三  
 後醍醐天皇 五〇・六・七・九・九四・九八・一〇三  
 一〇九・一一四・一六・一六八  
 後土御門天皇 一〇五  
 後堀河天皇 六七  
 後水尾天皇 一八・一八三・一八四  
 後村上天皇 一八  
 後圓融院 一三三  
 くら  
 サア・アーネスト・サトウ 三四七  
 西園寺公經 八四・九〇  
 齋藤拙堂 九三・三二・三三・三三  
 西行法師 七〇・九四・一八・一七  
 阪谷芳郎 三六九・三七  
 阪田三七郎 三四〇  
 嵯峨天皇 六・三・三三・三六・四二・二〇  
 坂上瀧守 二八  
 佐川田昌俊〔喜六〕 一八四・一八六・一八七  
 二五・三一  
 〔坂本浩然〕 三八・三二〇・三二  
 佐久間象山 三三・三四  
 佐久良東雄〔良哉〕 三五・三六・三八  
 三九・三〇・三一  
 櫻戸玉緒 三九・三〇・三二・三六

櫻ノ兒 一三・一四・一九  
 櫻町中納言〔成範〕 一五・一五七  
 櫻井雪鮮 二八九  
 佐々木氏信 九七  
 佐々木親秀 一三三  
 佐々木道譽 一三九  
 佐白米命 一一  
 佐々十竹 二〇七  
 佐藤一齋 二四七・二八九  
 佐藤正興 三四六  
 實氏 九〇  
 實方 五〇  
 佐原菊塙 三四〇  
 三條西公條 一六七  
 三條西實隆 一三九  
 三條西大納言 一五一  
 三寶院門跡 一四八  
 し  
 秋色〔お秋〕 一三三・一三三  
 式子内親王 八四  
 重明親王 二八  
 時慶 二〇一  
 シドモア女史 三五九  
 柴野栗山 二八三  
 芝山權中納言 二七〇  
 斯波義重 一三五  
 澁澤榮一 三七一  
 澁谷是入 二二八  
 島津孫四郎 二二三  
 島男也 三九  
 清水謙吾 三五三・三五五・三五六・三五七・三六三  
 昌叱〔里村〕 一五〇・一五一  
 昌孫〔里村〕 一八五  
 上東門院 三六  
 聖武天皇 四三・一六〇・一六四  
 淨名寺關白右大臣 八三  
 朱雀天皇 三五・五三  
 朱舜水 二七・二八・二〇九  
 俊成 五六  
 順徳院 六六  
 淳和天皇 三四  
 重明親王 二八  
 時慶 二〇一  
 シドモア女史 三五九  
 柴野栗山 二八三  
 芝山權中納言 二七〇  
 斯波義重 一三五  
 澁澤榮一 三七一  
 澁谷是入 二二八  
 島津孫四郎 二二三  
 島男也 三九  
 清水謙吾 三五三・三五五・三五六・三五七・三六三  
 昌叱〔里村〕 一五〇・一五一  
 昌孫〔里村〕 一八五  
 上東門院 三六  
 聖武天皇 四三・一六〇・一六四  
 淨名寺關白右大臣 八三  
 朱雀天皇 三五・五三  
 朱舜水 二七・二八・二〇九  
 俊成 五六  
 順徳院 六六  
 淳和天皇 三四  
 松花堂 一八五  
 稱徳天皇 一六〇・一六四  
 稱名院公條 一五六  
 白河法皇 五四  
 白井光太郎 三六五  
 晉永機 三四一  
 心敬 一四一  
 心前 一五一  
 管子〔其角〕 二二三  
 新庄維齋 一七一  
 新庄東玉 一七一  
 神功皇后 一〇  
 新待賢門院 一一七  
 す  
 菅原文時 三六  
 菅原道眞 三  
 杉原榮三郎 三六九・三七  
 杉本光貞 二二三  
 杉山復堂 三七  
 資季 七五・八四



すけなか 九  
助六 二〇  
鈴木華郁 三六  
崇徳天皇 三  
角倉氏 一九  
瑞溪(臥雲) 一九

せ  
青蓮院宮 二六  
清和天皇 五  
照高院道澄 一五〇・一七  
紹巴(里村) 一四九・一五〇・一五五・一五九  
一六〇・一六二・一七〇  
肖柏 一四九  
關雪江 三三  
宣祐法師 一七  
錢字文 一八二・一七〇  
膽西上人 四

そ  
宗祇 一四九・一五九

宗仍 一五〇・一五一  
宗碩 一四  
宗長 一四九・一五九  
宗牧 一五  
素性 五・五五・五九  
衣通姫 一三・一三三・一四  
園女(知鏡) 二二・三三  
染殿后 五九  
徂徠 二五

た  
大雅 二五三  
醍醐天皇 三  
道興准后 一七  
道風 一七  
道本 二九七  
隆兼 九  
高木孫右衛門 三三・三五  
高木彌太郎 三六  
高辻中納言 二四  
孝時 六

尊良親王 一〇四  
高橋氏 二  
高橋多一郎 三九  
高橋蟲鷹 三  
高平全權大使 三五  
隆光 九  
竹井澹如 三  
武田義甫 三  
武田信堅 一四  
忠度 七  
忠通 五  
田邊浩 三  
谷口香嶠 三  
谷文晁 三  
爲教 七  
爲村 二四〇  
タフト夫人 三五九  
田安宗武 二八二

ち  
知蘊 二五

忠海 一七  
中和門院 三〇  
親綱 一七  
親長 一五  
智鏡(園女) 二  
竹林院内大臣 二  
暹塚麗水 三六九・三七  
千葉介貞胤 一  
丈草 三三・三三  
陳元贊 二〇七・二〇九  
陳國振 二七〇

つ  
通齋 二四  
塚田十一郎 二九  
經嗣 一三  
經久 三〇  
常之入道 一五

て  
聽鶯莊主人(七條愷) 一九

定家 七五・八四・八七・八八・九〇  
貞室 三三・三五  
寺島良安 二  
輝資 一七  
天海(慈眼大師) 三三・三四・三五  
天智天皇 八

と  
東常縁 一八  
東福門院 一八  
戸川殘花(安宅) 三三・三六・三九  
三〇・七一  
時範 三〇  
常磐井入道前太政大臣 八  
徳川家綱 三三  
徳川家齊 二四  
徳川家光 一六・三四・四一  
徳川家康 一六・一九・二一・二五  
徳川齊昭 三〇  
徳川光圀 二五・二六・二七  
二八・三〇

徳川頼倫 三三・三六・三七  
徳川頼宣 一八・二八  
利家 一六・一七〇  
俊賢 五  
豊島景村 二四  
百百法眼俊道 二五  
鳥羽上皇 五  
登美宮吉子女王 三  
〔徳川氏文明夫人〕 三  
伴林光平 三五  
豊臣秀吉(豊太閤) 四・一六七

な  
仲實 六  
長束大藏大輔 一七  
中務 五  
中院通勝 一八  
中院通村 一七  
中鉢美明 三  
中村敬宇 三  
中村顯言 二



中村傳九郎	二五三
長屋王	二六
中山信興	三四六
永井直勝	一八五
永井尙政	一八六・一八七
那波道圓	一八八・一九一・一九〇
成島道筑	二四三・二四四
成島柳北	三四〇・三四一・三四三
成通	三四〇
名和花隱〔廣瀨花隱〕	三四〇
名和靖	三四四
西川求林齋	二二六
西野猪久馬	一八二
仁德天皇	七・九
仁如	一四〇・四七
仁明天皇	二八・二九・三三・三四・四二・四三
宣胤〔中御門〕	一三五
教房〔一條〕	一四八
梅室	二九三
芳賀矢一	三六六
橋本關雪	三六七
芭蕉	二六・二七・三五・三一・三三・三四
畠中銅脈	二七〇
八幡太郎義家	七
濱田道迪	一八八
華島雪亭	二九三
林愛作	三六九・三七一
林有章	三四八
林衝〔述齋〕	二四七・二四九・二九六
林春齋	二二六
林道春〔羅山〕	一八五・二三三・三四
林禪宇〔號〕	二九四・二九五・三〇〇
原雙桂	二五〇・三三一
晴季	一六七・一六九
東園基光	三六九
土方久元	三三三
雛屋立圃〔紅粉屋庄右衛〕	一九七・一九九
秀家	一六八・一六九
秀鄉	二〇五
秀次	一六七・一六九
人丸	四〇
兵衛典侍	二九
平田篤胤	三八
平田久	三三六
平野知秋	三三三・三三三・三四四
廣幡大納言	二七〇
廣瀨花隱〔名和〕	一八・六五
福羽美靜	三〇〇
二川相近	三〇六
藤井竹外	二〇
藤田東湖	三七・三八
藤原明衡	六
藤原篤茂	六〇

藤原宇合	二
藤原兼經	八三
藤原公任	一八四
藤原公平	一〇四
藤原公宗	一〇五
藤原清輔	六三
藤原國綱	四七
藤原實資	四
藤原惲窩	一七・一八
藤原隆資	一〇四
藤原親長	一〇五
藤原俊綱	五
藤原俊家	六七・六八
藤原成範〔櫻町中納言〕	六六・六九・七〇
藤原不比等	二七・二八
藤原廣嗣	一六〇
藤原尙通	一七
藤原基經	一〇五
藤原師通	四九
藤原師實	五四
堀河天皇	五四
藤原良相	五
藤原良房	四二・五二・五八
藤森弘菴	三七
佛行坊	二四九・二五〇
船津靜作	三五六・三五七・三六三・三七一
平城天皇	三七・三〇
辨內侍	二九
豐太閤〔秀吉〕	四六・一四〇・一六七・一六九
北條貞時	一七・一七・一七三
鳳朗	九七
堀田正敦	二九三
細川勝元〔典厩〕	二八三
細川潤次郎	一三八・一四〇
細川忠興〔熊千代〕	三三五
細川幽齋〔藤孝〕	一五〇
堀河天皇	一五〇・一五一
堀良山	六四・六五・六七
堀良山	二九三
牧野毅	三二四
雅枝	一六七
正子内親王	六四
政宗	一七〇
雅實	五四
益田少將	一七二
增田長盛	一七二・一七三
增田繁亨〔金太〕	一七二・一七三
松平定邦	二八二
松平定信〔樂翁〕	二八二・二八四
松平專助	二四二
松永貞徳	一八四・一九七
松岡玄達	二二二・二七・二九〇
松岡恕庵	二五七
前田德善院	一七二
前田利長	一七六



三浦淨心 二五  
 三浦義村 九六  
 三熊思孝〔花顛、介堂〕 一八三・二六四・二六五  
 二六六・二六七・二六八  
 二六九・二七〇・二七一  
 二七二・二七三・二七四  
 二八四・二八五・二八九  
 二九一・三三一  
 三熊露香 一八二・二六六・二六九・二七〇  
 二七一・二七二・二七三・二六五  
 道家 八四  
 道長 五九  
 通村 一八七  
 光繼 六六  
 美津女〔杉本〕 二三三  
 光信 六  
 水野總領事 三五九  
 水野忠順 三四四  
 水戸侯 二四一  
 皆川恩 二七〇  
 源清鷹 三三三

---

源前秀 二七五  
 源時綱 四七  
 源俊頼 六三  
 源仲朝 六六  
 源光行 七三・七四  
 源義朝 二八  
 源頼朝 九五  
 源頼政 七  
 源頼茂 七三・七四  
 御牧勘兵衛 一七二  
 宮川鐵次郎 三六九  
 三宅觀瀾 二〇・二一一  
 宮崎玉緒 一八二  
 三好學 三五・三六六・三六七・三七一

---

吉田松陰 三〇八  
 義詮 二四  
 義教 一四七  
 義政 一四七・一四八  
 吉道 三三  
 吉宗 二四〇・二四一・二四二・二四三・二四七

---

頼宣〔徳川〕 二四〇・二四一・二四二・二四三・二四七

---

頼山陽 二〇二・二〇七  
 頼杏坪 二〇  
 頼杏坪 二〇  
 良辨 四三

---

柳亭種彦 二二三  
 履中天皇 一〇・二一〇  
 リチャード・レイノルツ 三五六  
 良紀 一五七  
 了玄 一五二  
 良哉 三七・三八  
 良遇 六二

---

村井吉兵衛 三七一  
 村上天皇 三五・三六・四〇  
 村上豈夫 三〇五  
 室田老樹齋 三四五・三四七・三四八

---

明慶〔喝食〕 一四二  
 明治天皇 三三三・三三九・三五〇

---

持豊 二七四  
 基佐 一五五  
 基綱 九六  
 本居宣長 二七六・二七七・二七九・二八一  
 三〇六・三〇八・三三三

---

物部長眞膽連〔稚櫻部造〕 一一  
 師郷 一四三  
 師忠 一五五  
 文徳天皇 五二

---

涼泉院 三六  
 歴海 九  
 輪王寺法親王 二二  
 靈元法皇 二四八  
 冷泉定家〔定家〕 二四八  
 冷泉爲久 二四四

---

六條忠顯 一〇九  
 六如 二六七・二七〇・二七二

---

横川 一三六  
 渡邊洪基 三五三・三五四  
 渡邊省亭 三六七  
 王仁 七八・九

也有〔横井孫左衛門〕 二六二・二六三・二六五  
 揚守敬 三四  
 養珠院 二八  
 屋代弘賢 二九〇・二九一  
 安富軍八 二九二  
 安場保和 三〇九  
 梁川星巖 一一〇  
 山浦環 三三  
 山縣燕亭 二六九・二七〇・二七四  
 山崎闇齋 二二・二二三  
 山田耕雲 三六八  
 山邊赤人 一〇・三三  
 山本直良 三六九・三七一

---

行範 八五

---

よ

---

横田如圭 二九〇  
 義懐 三三  
 良經 七

---

吉田松陰 三〇八  
 義詮 二四  
 義教 一四七  
 義政 一四七・一四八  
 吉道 三三  
 吉宗 二四〇・二四一・二四二・二四三・二四七

---

頼宣〔徳川〕 二四〇・二四一・二四二・二四三・二四七

---

頼山陽 二〇二・二〇七  
 頼杏坪 二〇  
 頼杏坪 二〇  
 良辨 四三

---

柳亭種彦 二二三  
 履中天皇 一〇・二一〇  
 リチャード・レイノルツ 三五六  
 良紀 一五七  
 了玄 一五二  
 良哉 三七・三八  
 良遇 六二

---

村井吉兵衛 三七一  
 村上天皇 三五・三六・四〇  
 村上豈夫 三〇五  
 室田老樹齋 三四五・三四七・三四八

---

明慶〔喝食〕 一四二  
 明治天皇 三三三・三三九・三五〇

---

持豊 二七四  
 基佐 一五五  
 基綱 九六  
 本居宣長 二七六・二七七・二七九・二八一  
 三〇六・三〇八・三三三

---

物部長眞膽連〔稚櫻部造〕 一一  
 師郷 一四三  
 師忠 一五五  
 文徳天皇 五二

---

涼泉院 三六  
 歴海 九  
 輪王寺法親王 二二  
 靈元法皇 二四八  
 冷泉定家〔定家〕 二四八  
 冷泉爲久 二四四

---

六條忠顯 一〇九  
 六如 二六七・二七〇・二七二

---

横川 一三六  
 渡邊洪基 三五三・三五四  
 渡邊省亭 三六七  
 王仁 七八・九



櫻の名目

あ  
 曉櫻 一八三・一八三・三三三・二八七・三三一  
 赤葉八重櫻 一二六  
 「曙」櫻 一八一・一八二・一八三・一八六  
 浅黄(葱色)櫻 二〇四・三三八・三九二・三九八  
 二六〇・二九七・二九七・三五四  
 旭日櫻 二〇二  
 東枝垂 三五五  
 東錦 三五五  
 敦盛櫻 三五五  
 天川 三五四  
 雨宿 三五五  
 嵐山櫻 一八・一〇三・二二三・三〇・三〇・三〇・三〇  
 有明櫻 二〇四・二二三・三九二・二六〇・二六七・三五四

い  
 生駒櫻 三三〇  
 伊勢櫻 一九〇・三六・二五八・二五九・六六  
 一葉 三五四・三六三  
 一文字櫻 二二三  
 絲括櫻 二二三・二六〇・三五四  
 絲櫻(垂絲) 六三・八二・八三・九二・二四・三九  
 一四〇・一四一・一四二・一五六・一九〇  
 一九九・三三四・三九二・二五八・二五九  
 二七・二九七・三〇〇  
 犬櫻 三三九・三六〇  
 家櫻 三三九  
 妹背櫻 二〇二・三三〇  
 入相櫻 二八七  
 う  
 鬱金櫻 二〇四  
 うず(雲珠)櫻 六二・一四・三三九  
 薄墨櫻 二二三・二八七  
 渦櫻 三五五

え  
 婆(姥)櫻 一九〇・一九・三六・二五八  
 上溝櫻 二五八・二六〇  
 枝櫻(紋) 二〇五  
 江戸櫻 二〇三・二二三・三六・二五八  
 二六〇・三三七・三三〇・三五四  
 江戸彼岸 二六七  
 江戸法輪寺 二二三・二五九  
 衛門櫻 二二九  
 お  
 おを  
 奥州櫻 二二三・二三八  
 遅(晚)櫻 八二・一〇六・一四八・三九二・二六四  
 大内山櫻 二〇四  
 大芝山 三五五  
 大島櫻 三三〇  
 大提灯 二七・三五五  
 大砲 二二四  
 大南殿 三五五  
 大芳野 三五五

か  
 おまき櫻 一四五  
 小汐山 三五五  
 乙女櫻 二〇四  
 海棠櫻 一四五・二二三  
 香芬櫻 二二三  
 歌仙櫻 二二三  
 かにはさくら 三二  
 樺櫻 二二三・三三六・三三九・二六〇・二八六  
 鎌倉櫻 二二〇・二五八  
 寒櫻 三五五

く  
 桐谷 一三〇・三二二・三三三・一九〇・二〇二・二〇四  
 三九二・五八・三五九・二六〇・二六七・三五五  
 桐壺 二二四  
 麒麟 三五四  
 九曜櫻(紋) 二〇五  
 くより櫻 二五八

こ  
 苔清水 三五四  
 九重櫻 二二三・三三八・三三〇・三五五  
 小櫻 一四四・二二三・三三八・二五九・二六七・二八六  
 御座之間香 三五四  
 五色櫻 三五五  
 胡蝶櫻 二〇四  
 小砲櫻 二六〇  
 壽櫻 三三〇  
 木花 七  
 護摩櫻 二〇四  
 小町櫻 二二八  
 駒繫櫻 二二三・三三三  
 小緑櫻 二八七  
 金剛山 三五四  
 金輪寺 三五四  
 金王櫻 二七・二二八

さ  
 菊櫻 二二三・二五八  
 菊枝垂 三五五  
 黄櫻 二五八・二六一・二九七  
 三三五  
 祇女櫻 三五五  
 衣笠櫻 二〇三・二六六・三三〇  
 三三〇  
 牙櫻 三三〇  
 御衣黄 二〇四・二九二・三五四

し  
 紅梅櫻 三三九  
 黄金櫻 三三〇  
 小菊櫻 二二三  
 關山 六二・八二  
 元日櫻 二三八・二八六  
 紅櫻 二〇三・二三四・三五四  
 車返(御車返) 二〇三・二三四・三五四  
 鞍馬山 三五五  
 雲井櫻(紋) 二〇五  
 雲井櫻 二〇五  
 熊谷櫻 一九〇・三三九・二五八・二五九・二六七・三五四  
 一四四・一四五

そ  
 西行櫻 七二・二二三  
 逆手櫻 二二三・三五八・二六〇  
 左近の櫻 二七・三七六・一〇三・一〇六・一〇一



漣櫻 二六七・三〇〇  
 薩摩寒櫻 三五五  
 残雪櫻 二三  
 し  
 秋色櫻 二二〇・三五五  
 四季に花咲く櫻 八二  
 したれ〔したり〕櫻 三三・八三・四三・二六六  
 信濃櫻 二二〇・二六六  
 芝山櫻 一八  
 鹽籠櫻 一九〇・二二二・二六六  
 一五九・二六〇・二六六・三三〇  
 一四四・二〇三・二三八・三九二・四二八  
 二六・二六六・二九七・三三〇・三五五  
 猩々 三四四  
 上旬 三四四  
 寂光寺 二六八  
 朱雀 三四四  
 述懐櫻 二二三  
 松月 三四四・三五三  
 白雲櫻 二〇三・三三〇

白雪櫻 三六三  
 素〔白〕櫻 二〇三・二二三・三三〇  
 白妙櫻 三五四  
 白華山 三五五  
 白普賢 三五四  
 す  
 墨染櫻 二一九・三三九・二〇〇・二九七  
 墨染の櫻 四九  
 駿河臺香 三五四  
 せ  
 昭君櫻〔王昭君〕 二二三  
 雪山櫻 二二三  
 千里香 三五四  
 そ  
 索観瀨櫻 二二四  
 染井吉野 三四三・三五二・三六〇  
 た

泰山府君 七〇・一九〇・二六一・三五四  
 大師櫻 二四・三五  
 太申櫻 三五三  
 大膳櫻 三五四  
 龍櫻 三〇二  
 瀧香 三五四  
 「玉」櫻 一八一・一八二・二八七  
 玉の緒櫻 二八六・三二  
 手枕櫻 二八六  
 手弱女櫻 二〇二・三三〇  
 ち  
 中麴 二二四  
 兒櫻 一〇四・二二三・二九二・二九九・三六〇  
 地主の櫻 一五三・一五四・二八六  
 千本櫻 二二三・二五九  
 長州緋櫻 三五四  
 丁子櫻 三五五  
 提灯櫻 三三・三六一  
 つ

筑波根〔突羽根〕櫻 二〇三・二二三・二六六・三三〇  
 爪紅櫻 二六六  
 艶櫻 二六六  
 貫之櫻 三三〇  
 て  
 手籠櫻 一九〇・二〇三・二三四・三五五・三六三  
 天狗櫻 二二三  
 と  
 常盤櫻 一六・一八・一八二・二八七  
 殿櫻 二〇四・三五八・三五九・二六〇  
 外山櫻 二二三  
 豊國櫻 二二三  
 虎尾櫻 一九〇・二〇三・二九二・二九九  
 二六二・二六六・二九七・三三〇  
 な  
 長崎櫻 二二七  
 名島櫻 二二三  
 撫子〔罹麥〕櫻 二二三・三三〇

南殿 二二三・二五八・二六〇・二九八  
 南殿の櫻 二七・二八・三〇・三七・四〇  
 七・七四・一〇三・一〇六  
 奈良櫻 三五四  
 に  
 庭櫻 六二・一九〇・一九七  
 香〔匂〕櫻 二二三・二六〇・二六六・二九七・三三〇  
 香籠 二四  
 ね  
 寢覺櫻 二〇二・三三〇  
 練絹櫻 二四  
 は  
 葉敷櫻〔紋〕 二〇五  
 旗〔機〕櫻 二九七・三〇二・三三〇・三五五  
 はつ櫻 二三八  
 花櫻 六二  
 箒櫻 三四四  
 羽二重櫻 三五五

早櫻 八二  
 ひ  
 檜扇櫻 三三〇  
 彼岸櫻 一四三・一九〇・一九八・二六二・二四  
 彼岸枝垂 二五八・三五九・二九七・三五五  
 日暮櫻 三四・三五四・三五五  
 緋〔火〕櫻 六三・二二三・二八・二九  
 二五八・二六〇・二九七・三三〇  
 常陸櫻 二二四  
 一木二木 二〇六  
 一重櫻 二〇〇  
 一重櫻〔紋〕 二〇四  
 人丸櫻 一四五・三五四  
 日見櫻 二二七  
 氷室櫻 一四四・一四五  
 ふ  
 府君〔泰山府君〕 二六一  
 福祿壽 三五四・三六三



普賢象櫻 一三六・二七・三五・一三六・一三七  
 一九〇・二〇四・三九・二五九・二六〇  
 二八四・二八七・九七・三〇・三五四  
 一三四・一三六・一三七・二〇二  
 普賢堂櫻 一四一  
 富士櫻 二〇一・三三〇  
 富士山櫻 一五九・二三・二九七・三五五  
 不斷櫻 三三〇  
 多櫻 三三〇  
 紅枝垂 三〇三  
 紅毬 二二四  
 紅鶴 三五四  
 辨(便)殿 三三三  
 ほ 三五五  
 蓬萊山 二二三  
 鳳來寺 二二三  
 帆掛櫻 二二三  
 細川櫻(紋) 二〇五  
 細川香 三五四

---

帆立櫻 三三〇  
 牡丹櫻 二〇三・二九七・三五四  
 法輪寺 一八二・一八三・二三・二五八  
 二六〇・二六七・三五五  
 本紅櫻 二四  
 ま 二六〇  
 真櫻 三五五  
 増山櫻 一四五  
 豆櫻 一四五  
 み 三三〇  
 水分櫻 三五四  
 御車返 一八三・一八三・一八六  
 御園櫻 三五四  
 水上櫻 三五五  
 水無月(六月)櫻 一四・三五五  
 都櫻 三五五  
 深山隠 二二三  
 三吉野 一八三・一八三・一八六

---

紫櫻 三〇・三五四  
 む 三〇・三五四  
 め 三五五  
 名月櫻 三五五  
 も 三〇  
 桃色枝垂 三〇  
 や 三〇  
 揚貴妃櫻 一九〇・二〇二・三三八・三九・二五八  
 二六〇・二九七・三三・三五四  
 八重垣櫻 二二三  
 八重櫻 三七・八二・八三・八四・八五・八六・八七・八八  
 九一・一〇六・一一五・一二六・一四四・二〇〇  
 二〇三・三三四・二八六・三三〇・三六〇  
 八重櫻(紋) 二〇五  
 八重曙 三五五  
 八重一重 一三〇・二三・三八・三九・二八六  
 山櫻 四一・六六・八二・九一・一九〇・三三四

山櫻(紋) 三三八・三六〇・三六七・三六六・三九七  
 二〇五  
 ゆ 二八六  
 夕榮櫻 二八六  
 よ 二八六  
 夜櫻 二〇一・三三一  
 芳野櫻 二五八・二五九・三五四  
 吉野枝垂 三五五  
 吉野山 二六〇  
 ら 二六〇  
 廊間(樓間)櫻 二二三・二五八・二六〇・二六六  
 路頭櫻 二八六  
 わ 二八六  
 王昭君 三五五  
 若木櫻 二五九・二六〇・二九七  
 鷺尾櫻 一四八・二六〇・三五四



昭和十六年五月五日印刷  
昭和十六年五月九日發行



櫻史全 (定價五圓)

著作者 山田孝雄

發行者 福山秀賢

印刷者 堀修造

印刷所 大日本印刷株式會社榎町工場

發行所 櫻書房

東京市淀橋區上落合一丁目四七八番地  
振替口座東京一七八五一番



近刊

金工史談

香取秀眞著

規格 B 6 判 (四六新型)  
和紙使用約五〇〇頁  
寫真多數著者自裝  
定價參圓五拾錢十〇・一四

發行所  
東京市本區本町一丁目四十八番地  
大日本印刷株式會社發行部

山田孝藏

昭和十六年五月六日發行  
昭和十六年五月五日印刷



770  
107



41172









